



續群書類後
左致部以上

又4
2778



蘆田記

追加系図

完



蘆田記 追加系図 完

門 4
號 2.778
卷

天正堂詩書屋



天正堂詩書屋

天正堂詩書屋

依田衆姓名

信州佐久郡大井庄多田城主

信常子

依田備前守信常

信守子

依田下野守信守

信常弟

依田常陸今信蕃

源十郎 右衛門佐

善九郎弟

依田善九郎

家中

依田源八郎

左

依田左近之助

左

依田主膳

左

依田豊後

左

奥平全弥

依田勘介

田口城主後依田
依田德全守

續群書類從

合戦部四十九

六百十九

芦田記

一 依田常陸介一代、儀御聞被成度由被仰越候得共ソル亦上誰三不

存候我等兼候通書付申候常陸介天文七年戊申歳生

若名各八源十郎其後右衛門助佐亦天正九年二常陸介二成被申名

乘八信蕃二御座候

一年十二三ノ比誣訪高島ノ城ニ信玄公ハノ詮人ニ居被申候其後

年月ハ覺不申候ハ共武藏ノ内上野ノ境御嶽ノ城ニ居被申候我

等為ニ八祖父下野守信守被致在成候弟常陸介ニ彼地被參

父子一祈二二年開在城ニ候ツルヨシ家老ノ者近年マテ其物語仁候上

野ハ我等知行ノ内浄法寺ト申所ニ罷在候時御嶽事事不斷家

老ノモノ共物語仕候御嶽ト浄法寺ト同前祈ニ御座候城ハ御嶽町ハ



一祈

山州見玉
野上野
野野
石石辺
在リ

文七
正十一
八年四十

天正堂讀我書屋藏

淨法寺ニ御座候トモ城ノ根ニ川御座候間城ハ武藏ノ内所ハ上野ノ内

浦原在城

一其後信玄公今川氏真為退治駿州へ進發其時祖父ニ候依田下野
守信守同常陸介信蕃カニハラニ父子共ニ在城カト聞申候下野父
子先年サツクノ濱ニテ父子共ニ粉骨ノ鏡是故駿州退治ノ由古者
共申候ツル久シキ儀間年月ハ覺不申候駿河前氏實守人被成
候年ノ儀ニ御座候カト存候駿河前ノ年ハ駿河守人今在世人衆
可有御座候其々ニテ御尋可被成候

信守以六
日兵敗
四五千兵

一其後信玄公為信長退治元龜三年壬申年打テ御上リ候時先
味方々原ニテ合戦御座候其時分常陸介ハ證人心ニ信玄公ノ旗
本ニ居被申候是廿五年ノ年ニテ可有之候信玄公ハ東海道是大豆ノ
備同申候搦手ハ我等祖父下野守信守搦手ハ大将ニテ美濃中

十五歳

打テ上リ被申候美濃ノ内上村ト於申所祖父下野守信守被致合戦打勝
テ敵ノ大将明智宗叔ヲ打取被申候宗叔人数五千ニ御座候ニ下野守
ハ七百ノ人数ニテ得勝利候有信玄公ハ註進ノ飛脚大手口於味方々
原信玄公軍ニ御勝候古右左右ノ飛脚ト両方途中ニテ逢申由ニ候大
手搦手共ニ同時分合戦日モ三日共カレ不申候カト聞申候

信蕃籠
正三年

一甲戌年ヨリ亥ノ年マテ祖父下野守信守親ニ候常陸介信蕃父子共
ニ遠州ニ保ニ在城亥ノ年ニ至テ五月廿二日與ニ長篠ノ合戦信長公并ニ
家康公御勝武田勝頼公打負甲斐國引退其上家康様直ニ二保
城御責候ハントテ押寄五ヶ所ニ向城南銀方山辰
巳鳥羽山家康様御本陣東ア
クテラロ
ノ山北三十八テロノ山西トウ堂ノ
取手是ハ初島共申候 御取五月末ヨリ御責被成候六月十九日ニ
祖父下野守信守ハ病死ソシヨリ常陸介信蕃其マ、城搦堅メ十二月廿三日
七ヶ月城持詰罷有候後ハ兵糧無之濱松近所ニテ城中ヨリ足輕ヲツ

正三年
月十九日
守死ス

正三年
月十九日
守死ス

天正堂書成書屋

信祖蕃
信平仕

カレシ夜打強盜乱捕夜々ニ御座候ツレ共兵糧ナトハサヤウニ候時城中
 へ入候儀不四旋成候ツル五月ヨリ十二月一日ニテノ儀ニ候間兵糧モツキ果
 候へ共軍兵へノ氣付候トテ常陸介謀扶持ニ依テ三百餘申付藏ニ積
 ニ置城申下リノ者共ニ見セ兵糧ニ支カケ候儀ハ有間鋪候間心易
 存候へト被申候へハ軍兵トモ得チカラ力候十一月時分甲斐ノ勝頼公ヨリニ
 候ノ城ヲ明渡し申斐國へツホシ候ヤウニト両度申来候へトモ常陸介
 申サレヤウニ賜々ノ奉書ノ介ニテハ如何ニ候間勝頼公ノ御直書ニテ無之
 二明渡申儀ハイカノ由兩度申候得ハ三度目ニ勝頼公ノ御直書參
 候ニ付テ十二月中旬扱ノ談合候テ家康公ヨリハ大久保新十郎殿榊原
 小卒太殿何モ無カニテ證人ニ御越又我身親ノ方ヨリハ弟ノ依田兵
 九郎同源八郎兩人證人ニ參ニ十三日ニ城相渡候ハニ約束ニ候ツル処ニ
 二十三日スコレ兩フリ申ニ付テ親ニ候常陸介被申様ニアヌフリニテハ
 其後常陸介ハ遠州高天神ニ被教在城ソノ内毎日毎夜ノ戦ハ無際
 限候間不及記候
 一天正六七年ノコロカ越後景勝ト北条三郎殿ト取合ニナリ候時勝頼
 公ヨリ三郎殿へ加勢トシテ親ニ候常陸介參被申候テ山田ノ濱ト
 申処ニ無比類鎗ソノウヘ景勝ヲ追崩追討ニ數多討捕被申候事
 一天正八年辰ノ年ヨリ午ノ年ニ至テエケ年駿州田中ニ在城此内度
 々ノ追合ノ軍毎日ノ儀ニ候間三年ノ内不及記候シカル処ニ午ノ年ノ
 春勝頼為退治信長公出島木曾心變リユヘ早速信州落居信長公信
 州タカトウマテ打入候砌家康様穴山梅雪齋ヨリ内通被申候事

天正堂書

其後常陸介ハ遠州高天神ニ被教在城ソノ内毎日毎夜ノ戦ハ無際
 限候間不及記候
 一天正六七年ノコロカ越後景勝ト北条三郎殿ト取合ニナリ候時勝頼
 公ヨリ三郎殿へ加勢トシテ親ニ候常陸介參被申候テ山田ノ濱ト
 申処ニ無比類鎗ソノウヘ景勝ヲ追崩追討ニ數多討捕被申候事
 一天正八年辰ノ年ヨリ午ノ年ニ至テエケ年駿州田中ニ在城此内度
 々ノ追合ノ軍毎日ノ儀ニ候間三年ノ内不及記候シカル処ニ午ノ年ノ
 春勝頼為退治信長公出島木曾心變リユヘ早速信州落居信長公信
 州タカトウマテ打入候砌家康様穴山梅雪齋ヨリ内通被申候事

イサノ降申ニシテ親ニテ申候事ハ信長公ノ御直書ニテ候事

江尻へシマテ御先手打入家康様御奔向ノ砌マテ常陸介信蕃田中ノ城持治諸被罷有候ニ付テ家康様ヨリ勝頼滅亡ニキハマリ候上ハ
イツマテ期スヘキトノ御断ニマカセ候ニ付テ不及是田中ノ城大久保七
郎右衛門殿へ相渡申候ソノセツ山本帶刀為御使既ニ木曾元山兩
臣ヲ初信長公へ一味其外モ甲斐へ心愛ノ砌常陸介ハ只今マテ
田中ノ城持治被居候事款ナカラモ神妙ノ旨御感ニ思召其上累
年芦田手柄ヲハ敵ニテ御存候ノ間御家中へメレカヘラレ度御内
存御子レユロニ被仰下候トモ未國ノ落居モ無之時分故先信州諸
ハ三月十四日帰宅森勝藏小諸ニ被居候ニ付テ常陸介則勝藏ト
タイメン被申候其上信長へ御礼可申候由ニテ小諸ヲ出諏訪ニ城之介
殿御座候アイタ先城之介殿へ御礼可申ト存候トモ申達マテ家
康様ヨリ御飛脚被下必城之介殿へ出仕無用信長ヨリ甲斐國大名

切腹可被仰付書立之參ニ依田常陸介切腹ノ一言筆ニ御書付候間必諏
訪へ參候事相止夜通ニ密ニ甲斐國市川へマイリ家康様御目見仕候
様ニト家康様ヨリ御飛脚被下候ニ付テ則市川ニテ御目見仕スクニ凌山
路遠州ニ候ノ奥小川ト申所ニ上下六人ニテカクレ居被申候其後六月ニ
日ニ信長御果候ヨシ家康様ヨリ御飛脚被下本多孫八ハ一通常陸介
へ一通御書被下置ソノ御書今度明智信長御父子ヲ奉弑候其折節
和泉ノ境為見物家康様御越其御苗主ニテ無何事サカイヨリ大和
路ヲスリニ伊勢路御父子ニテ大高へ可有御着ノ由ニ候間早速常陸介
ハ甲斐國并信州へ參兩國トモニ家康様御手ニ入候様ニ引付候ト御
書ニ付テ則甲斐國衆引付可申トテ二候ヲ出甲斐國へ上下六人ニテ被
參甲斐入口柏坂ノ峠鐘ノ旗ヲ立候ハ柏坂ノフモト五里三里ノ間右ノ旗
見ハ芦田殿ノ旗ニテ候ト見知横田甚右衛門ヲハジメ迎ニ出甲斐ノ衆コ

春日山
奥三澤
戸田小

トクク常陸介ニ礼ヲ申ソシヨリ人数三千ニ成申候其後信州小諸六月二十日コロカニ被參候其時瀧川左近上野國ニテ氏政殿合戦ニウケマケ信州小諸ニ被居ニ付テ瀧川左近ニ常陸介モタイメンニテ其後春日ト申処ニ在処ニ候間マイラレ瀧川左近六月二十三日ニ小諸ヲ立木曾路ヲ指テ尾州長島落陽申候其ハ氏政ノ先手信州へ打入小諸へ大道寺尾張守入カワリ居申候家康様ト北条氏政ト御取合ニナリ氏政方万人人数ニテ白井口ヲ進發ソシニツキ常陸介ハ春日山ノ奥三澤小屋ト申処ニ籠リイラシ候若田小屋ト申此夏ニテ御座候氏政ハ若田小屋責候ハントラ彼行者ト申山越ヲ誣訪郡へ打入カケ原ト申処ヲ通甲斐國ミノハ原ニ陣ヲ取家康様ハ甲斐國新府中ニ被取御座山田原衆ト新府御對陣ノヤウスハ其許ノ衆クハレク可為御覺候其内常陸介ハ若田小屋ニ籠リ氏政ハ關東ヨリノケン贈ノ兵糧人数馬ヲ若田小屋ヨリ討取氏政へ陣續

正十年十
月河江木能
守田口
明退ク
北条氏
爲ス
正十年
月二十二
依田幸
介信蕃

ケナリカタク候ソル故氏政モ開陣其後未四月若田小屋ヨリ常陸介ウツテ出岩村田へ働此時常陸介モサイハイヲ取馬ヲ入追散シ家中者共モ數通家康様ヨリ御感状ヲ取申候其時ハ真田安房守モ上田ヨリ出合筑摩川ヲヘタテ軍見物其時常陸介ト對面ニテ御座候是ヨリウツキ高棚ト申小城山田井ト申小城共其外四五ヶ所ノ城ヲ取テ残ル侍トモ其時常陸介へ出仕礼申候大井民部ノ介小山田六左衛門平尾子藏平原善貞^進本林山豊後志賀興三^惣左衛門相木六郎望月卯月齋其後家中ノモノニ四條成候田ノ口ト申城ハ河江木能守居申候ツル常陸介威勢ヲ以テ田ノ口ノ城明退申候其時小諸へ大道寺尾張守相又岩倉ノ城ニ岩尾ノ主居申候此兩處ヨリホカニ佐久郡ニ敵一所モコシヤク候ツル間岩尾ノ城ハホソヌケニ可罷成ヲ二月二十二日ニ無利責ニ岩尾ノ城ヲ攻候トテ常陸介自身一先^イヲ任自身屏ヲノリ候処ヲ内ヨリ鉄炮ニテ押當打

天皇
信蕃
成書
成

以二弟依
田源八郎
名討死

信番説
真田
昌幸

弟ノ依田源八郎ニ右同前鉄炮ニテ被打先源八郎廿二日、晩相
果常陸介 イ洛字アリ

一甲斐信濃兩國 権規様御手ニ入申時大久保七郎右衛門被指遣信
州ノ内ニテ味方ニ成不申城々共ノ儀ヲ申上候トモ御書付ニ御座候先
以此度左様ニテ無御座候佐久郡城壬午年十月末ヨリ極月中旬マテ、
間ニ依田右衛門佐城々責落又ハ敵降参ニテ出仕治之大久保七郎右衛門
被遣候儀ハ翌年三月ノ事ニ御座候是ハ右衛門佐打死ノ後杜者是
其弟十四歳ニテ御座候之ハ万幸七郎右衛門申付候

右ノ分計ニテハクワシク難被 間召分候ハ間具ニ書付仕候天正十年
壬午ノ秋ヨリ依田右衛門佐計策ヲ以テ真田安房守引付申候此
義信州ニテ真田安房守使ヲ以申殊ニ先方ノ時分武田信玄公使番、
武藤喜兵衛武邊ノ行ヲモミキ、申候者ノ義ニ御座候右衛門佐モ其

所ヲ存寄先真田ヲサヘ引付味方ニ仕候ハ残ル侍トモチニタツ儀ニ
無御座間安ヲ存先真田方イ衣ニ午之秋津全寺ト申出家ヲツカワシヲ申遣家老ツカハレ

真田方ハ色々申遣真田對面具ニ右衛門佐方ヘモヘシ御座候間ソレ
ニ付二度目ニ依田十郎右衛門ト申者ヲ真田ヘツカワシ強和談ニ仕三度目ニ
ハ真田安房守自身多田小屋ノヲモト迄参候右衛門佐モ多田小屋ヨリ

罷出真田ト對面仕直談ニ良久談合御座候ハシ其時右衛門佐申様家
康様へ深存寄候ハ、起請文ヲ以テ申上可然ト好シ申候ハ真田をト納存
仕候則起請文ヲ上申候此時真田望ミニ乍恐家康様御起請文ヲ申請

度由申候ニ付テ右衛門佐方ヨリ真田上申候起請文ヲ為持新府へ使ヲコシ
真田望ミニ段ヲモ申上候処ニ家康様コトノ外御満足被為成家康様モ
御起請文ヲ真田ニ被下候是ヲ持右ノ使新府ヨリ四休帰申候初右衛門佐
手前ノ起請文ヲモ相シ真田方ハ為持遣申候ハ真田別テ存寄御起請

天正十年...

石蕃降
石村田

文^再三項戴拜見仕候由申候其時真田二一郡可被下由御約束三御
座候ツル由兼及候其後不被下候トテ真田御不足ヲ存候旨テ右衛門
佐申候ニ拙者手前ハ誣訪郡ヲ拜領申真田ニハ不被下候ハ寂前御
約束ノ筋同スナリ申候間右衛門佐手前ハ拜領ノ誣訪郡ヲ指上申候
間是ヲ真田ニ被下候ヤウニト申上誣訪郡ヲ指上申候此替地ハ上野ニテ
敵地ヲ被下候ハ私伐平ヶ候^{イハ申ミテ}テ如此御座候

一真田モ御味方ニ罷成候願ニト申候右衛門佐ト申合岩村田ト申地ヲモ
メトラント申真田ハ八幡原ト申処ニ陣ヲ取筑摩手川ノ左ニ入敷ヲ立ナラマ
カリ在候右衛門佐ハ筑摩川ヲ打越塩^{名田}ト申処ニ越上リ則川ニテ濡候
人敷ヲアツメソレヨリ岩村田ハ働其川口ニ敵突テカ、リ候処右衛門佐自
身真先エ馬ヲ入乗崩レ人数ニ三百ヲ討取申候ヤウニ罷候其時家
康様ヨリ御感状御直到頂戴之者トモ右衛門佐依田善九郎同弟

取高棚
降小由井

依田源八郎家中ノ者ニ依田左近之助依田主膳奥平金弥依田豊後
此者ニテ御座候ソノマ、真田モ上田ハマカリカヘリ右衛門佐モ人数入其
後ヤカテ岩村田ノモ、共降参仕岩村田右衛門佐手入申ニ付テ名代ニ
依田勘介ト申者サレヲキ申候ツル

一前山ト申城右衛門佐セメトリ申則平霜月右衛門佐モ芦田小屋ヘマ
カリ出彼前山ノ城ヘウツリシカト罷在候^{イミカニラミ}

一高棚ト申城ヲ計策ニテ取申候

一山田井ト申城テ入申此外城々ノ小侍トモアヲタヨリ降参仕候者一
番ニ平原善心ニ番ニ平尾平藏三番ニ大井民部之介^{是ハ備中子}
小山田六左衛門^{一怒}林山豊後志賀典三左衛門^{一怒}柏木六郎望月卯月齋^{一怒}是
等ハ古知行三千石ノカフニテ御座候イツレモ人数或ハ百或二百餘持
申程ノ小侍トモニテ御座候右ノ分午ノ霜月^{イニ子ヤシ}兩月中ニ皆右衛門佐

天正十一年...

一 所ニ出仕申候

一 佐久郡午霜月ニ治リ予ニ立敵無御座ニ付テ此中苦身ノ由右衛門佐
申被振舞候^トテ追鳥^鳥カリ仕候其追^鳥將ニモ譜代ノ家人並ニ右ノ仕
衆モ^四強出追鳥^鳥侍リ則鳥ヲ右衛門佐^前ヘアケ其鳥ノ料理御座候
ツル由ウケタマハリ候其上為儀美金子紅ノ系甲其外色々出シ度右
衛門佐存候ヘトモ^行恨イカ、ニテ是ヲ各々へ出シ度候中間ニテ^籠取
ニ致シ候ヘト申^籠取ニ^皆々取謹テ^戴申候キ右衛門佐申ヤウニ昨日
今日マテタカヒニ打ツウタレツノ敵ニテ候ツルニ如此昔代ノ被官並ノ
ノ仕合満足ノ旨申候由美候

正十一年 月

一 癸未正月元日ニ右ノ侍トモ代々ノ者並ニ右衛門佐^前ニ木形折紙ニ
テ礼盃等モ譜代ノ被官並ニ候ツル由^儀候此年家康様四十二ノ御
歳ニテ候間四十三ニ御祝直シ被成候御心持ニテ閏正月又御祝被成

候御分國其分ニ御座候

正十一年 月 信番攻 死諸戦

一 未ノ二月廿日ニ田ノ口ノ城へ右衛門佐上リ并柴田七九郎モ同道候テ
佐久郡一目ニミワタシ候高キ所ニテニ是程残所モナキ味方ニ成小諸一
城計敵ニテ候ニ其外岩尾ノ小城一ツニクキ仕合ト申明日ハ責ツフニ
可申候間柴田七九郎ニ一人モ御出シ候ハテ御見物候へ城責ヲ可
掛御目由右衛門佐廣言ヲ申候廿一日ニハ、一城ヨリ降参可申ヤウ
スニ付テ一日相待廿二日ニハ早天ニ取巻右衛門佐モ城際ヨリ下足輕旗
指ヨリ真先ニ右衛門佐屏ヲ乘候処ヲ鉄炮ニテ押當ホソノ下ヲ打被
振亦弟ノ依田源八郎是モ屏ヲ乘所ヲ左ノ章門ノ各所ヨリ右ノシヤ
ウモン所へ鉄炮ニテハ為打振惣軍取巻候ヘトモ大将右ノ仕合ニテ廿
二日ノ晚ニ源八郎先相果二十三日ノ未明ニ右衛門佐相果申候左様ニ候
ハ岩尾ノ次郎カ城カシヘカ子闖東スニヘ出奔仕候

正十一年 月 廿二日

依田竹福丸

一三月二至テ大久保被仰付右衛門佐子十四歳ニ成候間万事七郎右衛門指引次第ニ充^イニ候権現様御意ニテ十四歳ノ依田竹福丸ヲ御名字被下置松平原十郎ト名ヲ被為替七郎右衛門同道ニテ未ノ三月小諸参候是ヨリシテ大久保七郎右衛門後見ニテ佐久郡仕置申付候
一大通寺尾張守小諸ヲヤカテ明退佐久郡中ニ敵一人モ無御座候キ拙者ハ悴ノ時分ノ儀何ノ計方モ無御座候ワレトモ家中ノ年羅寄候者共物每度^イ義置申候通申上候以上

寛永廿年未七月日

一先日古キ儀書付奉指上ノ処ニ大納言様御披見ニ入御不審ノ儀被為暗御満足被為成ノ旨御意ノ由被仰下忝仕合ニ奉存候然者長篠合戦ノ後依田右衛門佐二候ノ城五月未ヨリ極マテ籠城時勝頼公ヨリ明渡し申候一由度々奉書奉候一其明渡し不申直書奉候ハ明渡可申

勝頼手書
以下

由右衛門佐申張直書奉候付テ明渡し申候此段ノ及聞召右ノ勝頼公ノ判形于今所持仕候者指上可申上旨御意ノヨリ被仰下候信長公甲州ニ打入ニ芦田切腹可被仰付之旨御書立候ニ付テ家康様右衛門佐ヲ御隠シ可被為置之御内意ニテ如何ニモ密ニ上下六人ニテ甲州市川ヨリ直ニ遠州山家へ被遣候時在所ニ諸道具持置候ニ滝川左近打入屋内一ツモ不残劇所仕候ニ付テ書物道具以下紛失仕無御座候六月ニ至テ信長公御果候間其時右衛門佐ハ甲信兩國家康様御参ニ入候様ニ才覚仕候一ト被仰付六人ノ昧ニテ小諸へ六月十八日ニ罷降候六月末ニハ氏政信州へ打入新府御對陣ノ仕合芦田小屋ニテハ毎日^イ主城耳ニテ^イ有候キ中々道具書物トトノ穿撃全ク可仕日限モ無御座候由聞之申候
一天正十年午七月廿六日ノ御書依田右衛門佐方へ一通ハ寫指上申候此時分ノ儀先書ニ申上候

天正十年七月廿六日

一天正十一年未年二月十二日、御書依田右衛門佐方へ一通寫上申候是
八前山ト申城伴野刑部楯菴罷有候ヲ依田右衛門佐于霜月責落伴
野刑部ハ相逃ニ仕候キヤカテ前山ノ城へ右衛門佐移罷有候内ニ被成加
勢小番ノ人數前山へ被遣候時之御書ニテ御座候

一天正十四年戌年四月十五日拙者儀於家康様御前覽ヲ御自身ハヤサセ
テ御腰物拜領松平ノ御名字并康ト申御字被下置候御詮文ノ寫
一通奉指上候

一天正十八寅年小田原御使、約家康様へ秀吉公ヨリノ御書一通寫上
申候此儀クハシク申上候ハスハ御合点恭氣可申カト存具ニ申上候此所
江木ト申ハ所之名ニテ御座候持主ハ依田能登守ト申候彼能登守田
口ト申城ニ罷有候ツル処ニ前山ノ城右衛門佐キヒレク責取申恐威勢
田ノ口ノ城ヲ明退關東守人仕八九年守人分ニテ小田原ニ罷有候處ニ

木能登
武田士
云フ

二十一年十
前山城ヲ攻
カ三

秀吉氏政ト手切ニ罷成小田原へ御出陣ヲ美氏政ノ頃内意申候ヤ信州
佐久郡阿江木谷へ彼守人依田能登守伴野刑部兩將ニテ働掛申候譜
代ノ主ニテ候彼阿江木谷ノ者共悉能登守ト一味仕敵ニ罷成候通三月十五
日ノ申刻ニ告未申ニ付テ是ニ候松平修理大夫康國并拙者打ツレ小諸
ヲ即時ニ乗出し一騎カケニ田舎道三十里ホト恭候へハ勝間ト申城へ恭着
十六日ノ早朝ニ人數調ソツトウ坂ト申山ヲ越敵方近ク恭候へハ日暮半時
程足輕合御座候内ニ旗ノ色モ見へ不申程ニ夜ニ入申ニ付テ其夜ハカ、
リヲタキ其前ニ夜ヲ明シ曉ヨリ打立取掛申候へハ白山石ト申小城籠リ
申候ヲ則乘崩レ林平ト申所ニ敵ヲ追詰敵モ取テ返レ敵味方入乱戦
御座候其ヨリ山ノシケニへ敵逃上リ候處ヲ先手ノ者共追掛申候へハ本
立ノ内ニ鯨波ヲトツト上申候ニ付テ木立ノ内ニテ取テ返レ崩レ候カト存
拙者馬ヨリ下立鑓作り待掛申候へハ亦味方ヨリ押返レ不殘追打ニ仕

州野谷
江木能
三身即
田大膳正
以通ル
野刑部
補討死

上州野谷ト申マテ悉追打ニ分捕高名ヲ仕候能登守ハ何ト逃近
候ヤラン首モ見へ不申候刑部ヲハ打捕申候此仕合為始杜者働ノ一
ツ書ヲ仕修理大夫方ヨリ夜通ニ家康様へ註進仕候所ニ則秀吉公へ
被掛御目秀吉公ヨリ家康様へ御書御座候此御書御感状ニテ
候由家康様御意ニテ頂戴于今所持仕候ヲ寫上申候
一天正十八寅年卯月二十九日秀吉公ヨリ松平修理大夫方へ御書一通
寫指上申候

一同年五月十一日之家康様ヨリ杜者方へ御利形寫上申候四月中旬
ニ松井田ノ城竹把ニ羽柴籠前守并景勝真田若田四子ヲ以仕寄
御座候中ニモ修理大夫杜者并除近ノ諸手ニ勝レ責寄申候キ去
其時ノ書物御感状トハ無御座候キ其後上州石倉ト申城請取ニ奉
候キ四格有ノ内ニ於陣屋之内氣違ノ様成者御座候ニ思掛モ無御座

修理大夫相果申候修理大夫跡式杜者ニ被下置候徒目之御列ノ
ノ寫指上申候

一同年八月朔日秀吉ヨリ杜者方へ御書一通是ハ別成儀無御座候ハ
共惣テ古キ書物共寫上申由御意ノ旨候間如此御座候

一文祿三年^{イ子}八月^{イ十二日}廿二日ノ御書ハ伏見御普請ノ時秀忠様ヨリ杜者方
へ被下置候ヲ一通寫上申候此年十月ニ諸大夫ニ被仰付右衛門大夫ニ
四格成候是ハ八月ノ御書故新六郎ト御座候論旨ノ儀御寫上申候
ニ及不申儀ニ御座候間其儀無御座候

一文祿四年七月廿六日秀忠様杜者方へ御書一通是ハ関白殿御
切腹ノ時杜者ハ江戸ニ四格有候ニ付テ江戸へ御書ニテ御座候

一文祿五年八月八日ニ家康様ヨリ杜者方へ御書一通寫上申候已上
御書共九十通

寬永二十年未九月廿日 重陽

右之書、寬永元丑年諏訪備前守殿而領分ニ相
成候以後而領主へ書出候ト相見得申候書中
権現様印朱印 秀忠公而書等所持仕
罷在候趣ニ即坐得共只今三ハ一向相見不申候
只今源十郎ト申モ、力依田家支配ト相見へ申
候 信及佐久郡下平尾村
源十郎藏写
留谷繁実本ヲ以テ校合

芦田記追加

信州佐久郡大井庄芦田城主依田備前守信常子

依田肥前守

信守

始住武上之場御嶽城又住駿州蒲原城属武田信玄數有功
又守遠州二股城天正十年奉属神君同年六月十九日

源十郎依田右衛門佐常陸介

信蕃

奉仕神君

天正十一年二月廿二日岩尾城攻之時討死年二十三
善九郎依田伊賀守

信吉

依田源八郎

信春

典兄信蕃同時討死

竹福松平源十郎修理大夫

康國

御祢号及御一字 住上州藤園城

天正十八年 月 日 於石倉城横死

福千代新六郎石衛門大夫

康貞

天正十四年四月十五日於御前元服賜御一字及御祢号御腰

物文録三年十月叙任後年出奔入高野山剃髮号加藤宗
月住越前福井

(附録)

竹腰文書抄

五月三日、以状同七日相届、忝拜見仕候、越前公、
沙状一通并宗月老不涉内状、寫是又相届、則涉前
江中上口、

一甲斐信濃兩國

權現様涉年二入、
信州者、
及被指、
共、甲斐信州、
及年二、

天正堂讀手書屋藏

砂中以暗信、岩尾と中、成之、若田右、及、同、
原、及、兩人、鎧、砲、と、あ、り、討、死、て、所、存、右、兩人、
討、死、終、つ、年、月、日、年、月、日、老、へ、尋、之、の、被、を、
有

湯、意、之、所、存、之、恐、惶、深、矣、

五月廿六日

堀外記

花押

山城守様

七重、帯、間、一、手、致、啓、上、之、然、了、先、日、湯、越、被、成、り、
依、田、右、邊、の、處、討、死、し、書、付、し、儀、被、入、湯、合、字、月、老、
分、被、依、越、湯、不、審、被、思、下、り、又、一、湯、合、字、踏、越、
別、る、所、満、之、被、思、下、り、右、し、通、手、被、能、攝、く、湯、心

得、被、成、字、月、老、湯、礼、可、被、依、を、し、右、湯、意、之、所、存、
以、恐、儀、言、

八月十七日

堀外記

花押

竹腰山城守様

天正十一年三月 德川家康。故依田信蕃子竹福九三松
平氏及ヒ諱字ヲ授ケ。康國ト稱シ信蕃ノ後ヲ承シメ。
天久保忠世ニ命シテ之ヲ監ス。忠世。康國ヲ助ケ遂ニ諸
城ヲ下ス。

(創業記考異) 三月、大久保七郎右衛門、依田源十郎ト共

ニ、小室ノ城ヲ降ス。源十郎ハ右衛門
佐カ長子ナリ

(神(標)小室) 當ニ小諸ニ作ル可シ、辨二月廿二日條ニ在リ、

(神君年譜) 三月、遣大久保忠世、往信州而平敵、以依
田死
子幼也 大久保忠世與依田康國、下小室城、

(御庫本三河記) 三月、信州ノ敵ヲ平ケシ為メ、大久保
七郎右衛門忠世ヲ遣テ、依田死シテ子如少ニ故
依田ノ康國ト大久保評ニ合セ、小室ノ敵ヲ降ス、

(依田記) 別ニ在リ
此畧ス

(貞享書上) 依田傳六郎

右ノ順ニ、〇三月廿二日、信蕃、若 権現村ニ大久保七郎

右ノ順ニ、尾ノ敵死ヲ承テ云 依田傳六郎

右ノ順ニ、後、依田傳六郎、依田傳六郎、又 依田傳六郎

右ノ順ニ、後、依田傳六郎、依田傳六郎、又 依田傳六郎

感悦ヲ經思石每人ノ者、其ノ所取去、惣領ハ猶元服被仰
付、杉平ノ所稱号ト康ノ字ヲ稱シ、其上ニ奉領佐
久郎六万石、所加増ノ地、略向テ二万石、甲州ニテ
二万石、郡公十万石、相領仕、其ノ所、杉平傳六郎
康國ト申ル

天正十一年三月、権現村上意リ、杉平傳六郎康
國ヲ相領付、康國人數ノ内、是ノ因衆十六騎、小室
衆九騎、与島衆四騎、相木衆十一騎、少田井衆七
騎、以上四十七騎、依田肥前守同心ノ家定以進、

康國之禮文状を以て、今之在りて傳ゆ、
定

一 若田衆 十六騎

一 小室衆 九騎

一 与良衆 四騎

一 抄本衆 十一騎

一 十田井衆 七騎

右一連同心中定は、有無相違少新、何故、

天正十一年

修理大夫若名
抄本傳中

三月廿六日

康國書列

肥前守殿

(實政重修訪書傳) 依田系清 別ニ在リ畧シ

信着

康國

(貞享書上) 大久保忠世、新十郎 七郎左衛門 天正十一年抄本傳

十印康國と共に、信濃國小諸城を攻め、こゝを隔

て、○前後畧、實承流載せ、大久保家傳畧
ニシテ、傳ハラス、故ニ此傳所見ナシ、

(按)家忠リ純追加武徳大改純、武臣編年集、此
修謄謄不多し、故ニ録セズ、但沙牟語微考、諸
誠ノ下ルヲ以テ三月四日トス、何據ヲ知ラズ、姑ク存
録シテ考ニ備フ、

(沙牟語微考) 三月信成平治の爲る、大久保七郎右
也、此世をさる、是依田右将の佐信著、備前源
十郎、式時、爲る、是年ちる故也、大久保忠也、即源十
郎と相誤りて、小室城を三月四日ヲ攻落し、此源
十郎、其弟、新六郎、有る、又、源十郎の姓を賜ふ、

花押、清字と稱下、花年修理亮、源國と稱せり、於是
依信著、忠死と感、思召、故あり、

(按)本書源十郎、新六郎、花、花年氏、及清字ヲ
賜ルト爲ス、非ナリ、依田記ニ據ルニ、新六郎、貞享書上
ハ十四年四月十五日、ハ十六日、二係、且源十郎、新六
郎、猶也、福、氏ト稱し、此、何、新、福、始、メ、源、十
郎、原、ト、稱、ス、依田記貞享書上、三、明、文、アリ、其
修理亮、源國トスルモ、亦、非、ナリ、

(参考)

(信府佐記) 諸城記

一 小諸ノ城 或ハ古語スハ古語 佐久郡千曲川ノ涯ニアル平城ナ

リ、此辺ニテ千曲川ハ南ヨリ北ニ流ル、
此邊ノ城ノ東ヨリ西ニ流ル 古平姓ノ人領

地ニテ、小諸殿ト稱ス、手代橋氏ナリ、今ノ城地ト西

原トノ間ニ一里山アリ、其辺ニ屋敷ヲ構テ住セリ、

大井伊賀守ト云ク人、鍋蓋曲輪ト云所ニアリテ、

手代橋氏ヲ七シテ、此地ヲ押領ス、舊城ヲ築ク故、

大井ノ城トモ云ヒ傳フ、伊賀守ノ道シテ洞春ト

号、其子伊賀守ニ後入道シテ道玄ト号、二代

